

## 金星の觀望好期

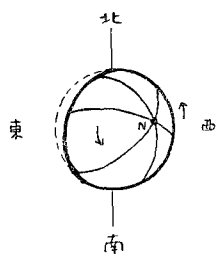
今年の天界に於ける呼び物の一つは何ぞ言つても金星である。年の明けると共に既に日没後の西天にあつて、宵の明星として輝やき、其の後、漸次、太陽との離角が大きくなつて、觀望し易くなる。七月二日には最大離角で、太陽の東45度の所にあり、八月五日には最大光輝—4.2—となり、八月十八日には停留、それから逆行に移り、九月十日、太陽と内合して曉天に移るまで、九ヶ月間、永く西天を賑はす。(十月からは東天を飾るが、之れは又改めて記さう。)

「金星は自轉してゐるか否か」といふ問題が、ガリレオ以來、學者間の論争となつてゐる。過去三百年間に、此の金星の自轉週期として如何なる異説が唱へられたかについては、「天界」(第四卷)第42號第236頁に詳しく説明されてある。尙ほ、去る1921年、遊星表面學の權威William Pickering(ピケリング)氏が「金星は殆んど黄道面にある自轉軸を持ち、自轉時間は約68時間である」といふ新しい觀測結果を發表したとは「天界」(第一卷)第11號第222頁に記した。ところが、近く1924年の春四月9日から同月16日までの六日間に英國の大英天文協會觀測部(B.A.A., Observing Section)水星金星部長マツキウン(H. McEwen)氏が其の住居するカムボスラング(Cambuslang, 之れはグラスゴー市外5キロ東南)市に於いて、「5吋」レイ(Wray)屈折望遠鏡に162倍の倍率で觀測した結果を、1926年三月31日の大英天文協會の例會に於いて報告した(Hepburn氏代讀)。それによる。マツキウン氏は金星の自轉時間を66時間乃至77時間と觀測し、ほゞピケリング教授の報告を確定したところになつてゐる。

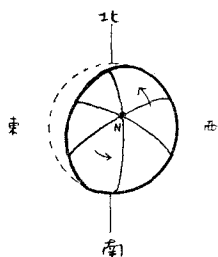
今年の金星接近期は此の種の觀測をするために非常に好都合である。ここに、ピケリング、マツキウン兩氏の説により、今年三月から八月まで毎月1日の時、地球から見てゐる金星の形と、其の自轉軸の位置、及び其の自轉の模様を圖に表はした。之れによつて金星が如何に不可思議な自轉をやつてゐるかを見、尙ほ手頃の望遠鏡を持つてゐる人々は觀測せられんことを望む。金星は光輝が強いから、七八月頃には白晝肉眼にも見え、其の表面觀測は、日没後よりもむしろ晝間の方が適當である。只、觀測者の熟練の外に、觀測地の空氣の平靜なところ、金星面に異常な斑點の出現を忍耐して待たなければならぬ。金星は平常非常に濃厚な雲霧に閉されてゐるから、稀に見える斑點のみを頼りしなれば自轉の觀測は不可能であるところを、マツキウン氏も述べてゐる。(山本)

1927年の宵天に於ける金星

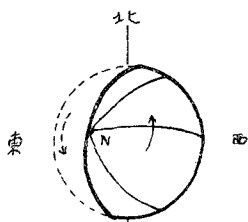
N = 金星の北極  
S = " 南極



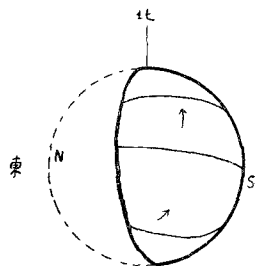
3月1日  
視直径 11秒角



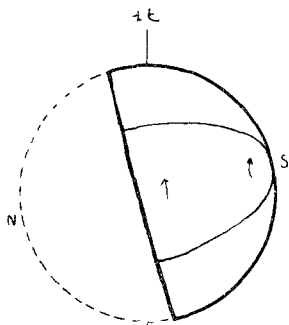
4月1日  
視直径 12秒角



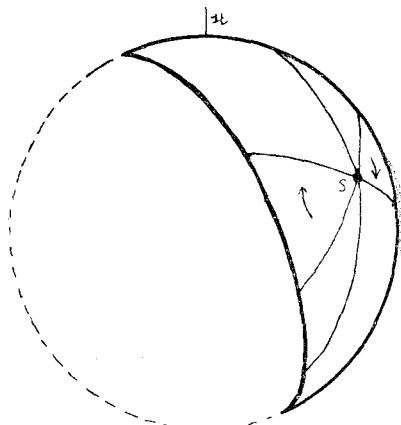
5月1日  
視直径 14秒角



6月1日  
視直径 18秒角



7月1日  
視直径 24秒角



8月1日  
視直径 36秒角